



Title	対人関係を表す言語的手段：ハンガリー語・スロヴェニア語・日本語の対照
Author(s)	クルジュリッツ, タマーシュ; ボルショシュ, レヴェンテ; 重盛, 千香子 他
Citation	ハンガリー研究. 2025, 3, p. 79-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対人関係を表す言語的手段

—ハンガリー語・スロヴェニア語・日本語の対照—

クルジュリッツ・タマーシュ、ボルショシュ・レヴェンテ、
重盛千香子、ニドルフェル・モイツァ

1. はじめに

本研究では、認知語用論的アプローチを用いて、ハンガリー語、日本語、スロヴェニア語の3言語における対人関係（= interpersonal relationship¹）を表現するためのさまざまなストラテジーを分析する。研究の焦点は、これら3言語における対人関係の構築（または再構築）のための言語手段を検証することである。

研究対象として、ハンガリーで制作された映画『証人（*Atanú*）』を選び、その日本語字幕、スロヴェニア語字幕を用いて、同一場面における各言語の対人関係構築のために使用する言語手段を比較分析する。それにより、同一の状況設定で同一の対人関係であっても、言語によって異なる語用論的ストラテジーが使用される場合があることを明らかにする。このような分析を通して、3言語それぞれにおける対人関係構築のための言語的手段について、質的データを提供することを目指す。

本稿の構成は以下の通りである。まず、ハンガリー語、日本語、スロヴェニア語それぞれの言語に固有の対人関係構築の手段を紹介する。次に、認知語用論的枠組みにおいて、対人関係構築のための言語的手段に関する理論的背景を概説し、対人関係表現の特徴とその広がり言及する。さらに、3言語並列コーパスを用いて、対人関係構築のための言語手段や構文の違いを分析する。最後に、分析結果を要約し、他の研究分野への応用可能性について述べる。

2. 対人関係を表す言語手段

談話に参加する者は、対人関係を表現・形成するために、さまざまな手段を自由に使うことができる (Kato 2013: 43)。その方法や組み合わせ方は、それぞれの社会で慣習化され、また話し手個人がある程度定型化して使用していることが多いが、実際の会話が進行する時は常にダイナミックに連携し、互いの影響力を強めたり弱めたりしながら、参加者間の人間関係を形成している (Locher & Watts 2005, Debray & Spencer-Oatey 2022)。

2.1 ハンガリー語における対人関係表現

対人関係の表現に関連する言語手段としてハンガリー語では、敬称・親称²の使い分け、さまざまな挨拶や呼びかけの表現などが際立っているが、直接性・間接性、文体や語彙、有用な表現の選択 (Veres-Guspiel 2017)、声の調子や身振りなどの要素もある (Gifford 2010)。

上記の中でも、話し手が敬称・親称のどちらを使うかはハンガリー語で特に重要で、動詞の活用だけでなく、名詞や代名詞の語形変化、人称代名詞の選択、あいさつの形など、その他の社交的要素にも影響するため、この敬称・親称の選択が談話全体に影響する。

親称 (*tegezés*: 単数二人称代名詞 *te, ti* の系列) の使用は、より親密な対人関係を表し、二人称単数形と二人称複数形 (代名詞と接尾辞) の明示的形態素で表される。ただし、命令形は例外で、単数の親称はゼロ形態素で表されることもある (*Várj!* 「待て!」)。親称形の使用は、他の文法的要素においても典型的な選択を伴う。例えば、挨拶は親しみを表す表現 (*Szia!*, *Szervusz!*, *Sziasztok!*, *Szervusztok!* など) を使い、呼びかけの形式は、個人名 (ファーストネーム) やあだ名・愛称を使うのが一般的である。

ハンガリー語の敬称の使い方はいくつかある。使い分けは、微妙に異なる対人関係に関連しているが、共通するのは、話し手が聞き手に対して三人称単数形 (動詞・形容詞は通常ゼロ形態素) または三人称複数形を使うことである。これらの形態は、基本的には発話場面の外部にいる人物 (三人称) を指すために使われるが、聞き手に対して使用する場合

は、話し手と聞き手との間の距離を比喩的に表現する (Tátrai 2011)。敬称の使い方は、話し手が使う人称代名詞の違いによって特徴付けられる。現代ハンガリー語では、聞き手への敬意を意味する *önözés* (代名詞 *Ön* とその複数形 *Önök* の使用) と、聞き手への敬意があまり強調されない *magázás* (代名詞 *maga* とその複数形 *maguk* の使用) を区別している。

敬称に分類されるもう 1 つの典型的な用法は、上記の人称代名詞を使う代わりに、話し手が相手を名前や肩書きで呼ぶ場合である (*igazgató úr* 「(男性の) 監督さん」、*tanárnő* 「(女性の) 先生」、*doktor úr* 「(男性の) 医者・博士」、*elvtárs* 「同志」など、Domonkosi 2002: 118)。対人関係表現のさらにもう 1 つの可能性は、子どもと大人の会話でよく使われる *tetszikelés*、つまり動詞の活用形の代わりに助動詞 *tetszik* (本来の意味は「好む」と動詞の不定形を組み合わせた構文の使用である。

知り合い同士の間では、親称と敬称のどちらを使うかは、その人間関係によって決まる。つまり、同じ相手と話す場合、状況や話題などに関係なく、通常同じ形を使う。敬称から親称への切り替えには、社会的に慣習化された手順がある (つまり、誰が、いつ、どのように、この切り替えを開始できるのか)。親称の使用を拒否したり、敬称に戻したりすることは失礼にあたる。

見知らぬ人の間では、親称・敬称の使用判断は、発話時の文脈の特徴と関連している。談話では、親称と敬称の使用をめぐる当事者間の交渉が特に重要になる (ただし、この交渉が明示されることはほとんどない)。この 2 つの形式を使い分けることは、言語使用や対人関係に重大な影響を与えるだけでなく、二者一択の境界がかなりはっきりしているため、話し手はしばしば独特の戦略を用いて、明示的な選択を避ける。そのような戦略には、一人称複数形の使用が含まれる。一人称複数形は、話し手と聞き手の両方に関わるため、これを使用することで対人関係の明確な表示を避けることができる。

2.2 スロヴェニア語における対人関係表現

ハンガリー語と同様、スロヴェニア語でも、話し言葉 (および書き言

葉)の談話において対人関係を明示的に示す言語的手段には、敬称・親称の区別、挨拶や呼びかけの形式、距離を表す表現の使用などがある。これらは、公式か非公式か、談話当事者間の社会的距離、つまり平等か一定の序列があるかを示すものである。

敬称は、当事者間の社会的距離が大きく、形式的または儀礼的であることを表現するために使われる。反対に、くだけた文体は親称で表現される。二人称単数の動詞 (*ti si* 「あなたは、君は」、*prideš* 「(あなた・君が)来る」など)は親称で、二人称複数の動詞 (*vi ste* 「あなたは」、*pridete* 「(あなたが)来る」など)は敬称で相手と呼ぶ場合に使われる。スロヴェニア語には、単数形と複数形に加えて、双数形もあり、2人の聞き手に対して話す場合は二人称双数形の代名詞と動詞を用いる (*vidva sta* 「あなたたち2人は」、*prideta* 「(あなたたち2人が)来る」)。しかし、双数や複数には、親称と敬称の違いがない。ただし、動詞の形は、名詞の単数、双数、複数における性別(女性、男性、中性)にも左右される。名詞を置き換える人称代名詞も、性・数・格によって、また敬称・親称・準敬称(後述)によって、異なる形をとる (Toporišič 2004)。

スロヴェニア中部、特に首都リュブリャナでは、準敬称がよく使われる。これは、繫辞が敬称(二人称複数)でありながら、分詞が親称(単数)という組み合わせである(以下の例ではどちらも、分詞が複数形の *prišli* 「来る」ではない)。

- (1) a. *Spoštovana, boste prišla?*
 尊敬する-受分-1 女単-主 繫-未-2 複 来る-時分-女単
 「奥さま、来てくれますか。」
- b. *Spoštovani, boste prišel?*
 尊敬する-受分-1 男単/複-主 繫-未-2 複 来る-時分-男単
 「先生、来てくれますか。」

準敬称は、話し相手とのより親密な関係を築くために工夫され、あまりフォーマルでない場面で広く使われている。今日では、日常的なコミ

ユニケーションで親称が一般的になりつつある。

社会的に尊敬されている人に対しては、苗字の代わりに *gospod/gospa* (英語の *Mr/Mrs* に当たる) という呼びかけや、社会的地位や職業などの名称の男性形または女性形を組み合わせ、*gospod doktor / gospa doktorica* (博士)、*gospod minister / gospa ministrica* (大臣)、*gospod direktor / gospa direktorica* (社長) などが使われる。

本研究のコーパスにも見られる *tovariš* (男性形) または *tovarišica* (女性形)「同志」という呼びかけは、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国の一部であった頃のスロヴェニアでは、第二次世界大戦中とそれ以降、政治体制が変わる 1991 年までの共産主義時代に広く使われていた。この呼びかけの形は、明らかに上下関係がある場合でも、制度の中の対等性を表現するために使われ、同僚間の標準的な挨拶としても機能した。

2.3 日本語における対人関係表現

日本語で対人関係を表現するために使われる言語手段の主要なものは、敬語体系である。敬語の使用（または不使用）は、それぞれの文脈において、聞き手やその他の人（さらには物）に対する話し手の態度を反映する。

敬語使用の主な目的は、聞き手や第三者に対する敬意、そして会話の内容や場面、媒体への配慮である（南 1987: 12-16, Bajrami 2016: 26）。話し相手に対する敬意を表現するためには、話し手は 2 つの異なる方法でこの区別を行う。1 つは尊敬語と呼ばれ、他者（聞き手または第三者）の行為や状態に言及するときの具体的な表現方法である。もう 1 つは謙譲語で、話し手自身（または話し手の家族やウチの人）の行為を指す時に使う具体的な表現である。同じような区別は、形容詞と名詞にもあり、特に接頭辞の「お・ご」を使って表現する。特定の文型では、これらの接頭辞は動作を指すためにも使われ、尊敬または謙譲の表現になる。

(2) a. かばんを持ちます。

b. おかばんをお持ちします。

敬語の適切な使い方は、社会で慣習化されており、敬語の欠落や過剰な使用は、皮肉、無礼などの誤解を招く恐れがある (Matsumoto 1989)。

日本語には、普通体と丁寧体という、異なる述語形式を特徴とする 2 つの主要な文体がある。普通体は、家族や親しい友人の間で使われる日常的な表現であるが、丁寧体は、年上や目上の人に対して、また、公の場面でも使われる。普通体と丁寧体の違いは、主に形態素や構文、そして個々の単語の選択にも見られる。同じグループに属するメンバー間であっても、両方の文体を使い分けることができる。カジュアルな場面で普通体を使っている者同士が、より正式な場面では (例えば、公な場面、または大勢の聴衆の前で) いつでも丁寧体に切り替えることができる。つまり、会話における対人関係構築で当事者たちが使う表現形式は実際の状況にも左右されるため、同じ話者でも異なる状況や立場によって異なるレジスターを使う可能性がある (Bajrami 2016: 25)。

話し相手への呼びかけの場合、日本語では「～さん」という接尾辞を使うのが一般的だが、それ以外にも、子どもや同僚、先生、職場の上司などに対して、さまざまな呼びかけ方がある。接尾辞をつけないという選択は、無礼であるか、非常に親密な関係であることを意味する。相手を表す人称代名詞「あなた」は存在するが、頻繁に使われることはなく、通常は避けられる。失礼にならないためには、その人の名前か、その状況における社会的地位 (職種など) を指す名詞を使うほうが適切である。

- (3) a. *あなたの本を読みました。
b. 先生の本を読みました。
c. 田中先生のご本を読ませていただきました。

日本語には性と数の区別がないため、豊富な敬語体系が特定の状況における対人関係を理解する上で重要な役割を果たす。敬語を使った (有標の) 文では、その使用によって主語を推測することができる。多くのヨーロッパ言語とは対照的に、日本語には敬称と親称の 2 項対立がない。

対人関係は終助詞、授受動詞、受身と使役の接辞の使い方にも現れる。終助詞は文末に置かれ、モダリティ（具体的な状況や内容に対する話し手の主観的な見方、例えば疑問、希望、期待、禁止、感嘆など）を表し、述部の丁寧体にも普通体にも使うことができるが、通常、話し言葉に多く使われる (Pardeshi & Kageyama 2018, Shigemori Bučar & Žele 2024: 86)。また、授受動詞は他の動作動詞と組み合わせて機能動詞として使われ、行為のやりとりの方向を表す。主動詞は連用形「〜て」の形をとり、誰かが何らかの好意を与えたり受けたりする立場にある場合、その人の視点・立場があとにつづく機能動詞で表現される (Shigemori Bučar & Žele 2024, 64-65)。例えば、「くれる」は、命令形で使うと、話し手が聞き手に何かをしてほしいという依頼表現になる。このような用法は、直接命令形を少し柔らかくした表現と考えられる。

以上、2.1～2.3 節で述べた各言語における対人関係表現の特徴を、表 1 にまとめる (次頁表 1 参照)。

以下、表 1 で見られる事柄を短くまとめる。3 言語に共通して最も重要なのは述部の形である。ハンガリー語とスロヴェニア語の場合、人称と数の一致を述部にも文法的に対応させる敬称と親称がある。日本語でこれに相当する選択は丁寧体と普通体の区別であろうが、文法的な一致は要求されず、明示されない。また、日本語には敬語が対人関係表現にさらなる幅を持たせる。そして、どの言語でも述部の形があいさつやその他の表現の選択とある程度呼応するのが普通である。

社会主義時代の挨拶（呼びかけの形）は、本研究でも見ることができる (⊙³ *elvtárs* と ⊗ *tovariš/tovarišica*)。他にも対人関係の構築に寄与する言語的要素がいくつかある。形容詞や名詞、モダリティ要素などである。表の最後には、敬称と親称、または丁寧体と普通体の切り替えについても示した。

3. 対人関係 — 認知語用論的アプローチ

3.1 言語使用者の社会的適応性と交渉能力

人間の存在は本質的に社会的なものである。つまり、人間は社会の中

表 1

	ハンガリー語	スロヴェニア語	日本語
述部の形式	敬称 / 親称 三人称 / 二人称 (単/複) 活用、格変化、代名詞の選択	敬称 / 親称 二人称複数 / 二人称単数 (双数には区別なし) 活用、格変化、代名詞の性別	丁寧体 / 普通体 ～です・～ます / ～だ・ φ 性・数の区別なし
	準敬称 (tetszikelés) (子供から大人への話し方)	準敬称 (二人称複数の繫辞 + 単数形の分詞) (スロヴェニア中央部に限る)	豊富な敬語体系
↓ (関連する文法事項)			
社交的表現	各言語・各社会で慣習化されている		
挨拶 呼びかけ (+肩書き)	敬称・親称の区別 敬称には正式な名前と 肩書き・役職を使用 親称には個人名、あだ名を使用	敬称・親称の区別 敬称＝正式 親称＝親しい間柄 + 性別	相手や場面により、 さまざまな形から選択 接尾辞を使わずに 呼びかけるのは失礼か、 特別に懇意な場合
社会主義での呼称	elvtárs 「同志」	tovariš/ica 「同志」	――
形容詞・名詞	――	――	関係のある物事に言及するとき
モダリティ要素	法動詞、法助詞	法助詞、法動詞、条件法	終助詞、機能動詞、接辞
切り替え	敬称→親称 (慣習化)。 拒否や後戻りは失礼) 敬称・親称の区別を避けるには 二人称複数を使用	敬称→親称 (慣習化)	場面に合わせて切り替え 丁寧体⇔普通体 (双方向)

でさまざまな人間関係を作っていくが、その関係は言語的な行動と非言語的な行動の両方によって表現され、形成されていく。対人関係表現は言語運用における不可欠な部分であるだけでなく、言語の主要な機能の1つであり、言語使用者の認知過程と言語使用者間の相互作用の両方を特徴とする。言語を使用するとき、話者は個人の視点から世界を認知し、それを言語化して他者と共有しようとするだけでなく、言語運用の一部として常に対人関係をも形成する。Tátrai (2011: 36-41) は、言語使用のこれら2つの基本的な特徴を、「言語の間主観的認知と対人関係のメタ機能⁴」と呼んでいるが、これらは言語活動に同時に存在し、密接に関連している。

対人関係の言語的表現は、言語使用を特徴づける動的適応性の一部である。社会における私たち個々人の経験はさまざまに解釈することができる。会話における各発言は発話者による選択、すなわち意思決定 (choice making) を意味し (Verschueren 1999: 55-58)、発話者は自身の意図と共同体の規範の両方を考慮しながら、最も適切と思われる手段をその場に応じて選択する。同じことが、会話に参加する者同士の人間関係についてもいえる。対人関係は社会規範の文脈における談話の中で絶えず再構成される。したがって、言語使用は、言語体系のさまざまな領域に影響を及ぼす談話戦略の選択として理解することができる (Tátrai 2011)。同時に、話し手が自身の選択を聞き手に押し付けようとする一方で、聞き手は自身の期待にもとづいて話し手の選択を受け入れるか異議を唱えるかをその都度決定するため、言語使用は会話の参加者間の交渉によっても特徴付けられるといえる。

社会の規範とは、特定の共同体において、特定のコミュニケーション状況下での適切な発話を促す社会文化的ルールであり、比較的安定したものである (Tátrai 2011)。会話に参加している者は、社会規範の文脈の中での原則と使用可能な手段に従って、自分自身の実際の目標を達成しようとする。これは、発話者のメタ語用論的認識、つまり、さまざまな言語構造、認知プロセス、そしてそれらに関連する社会文化的期待を考慮する能力によって可能になる。言語的選択肢の認識の度合いや顕著さ

はさまざまである。ある状況下で頻繁に使用される選択肢は無標の傾向があるが、使用頻度が低い選択肢は有標で (Schwartz 1980)、処理に多くの労力を要する (Givón 1991)。また、ある選択に対する認識や有標性が高いほど、内省のレベルも高くなる (Yang 2018: 202)。

3.2 対人関係表現の特徴と広がり

特定のコミュニケーション場面において、話し手は普通、言語の認知的、社会的、文化的機能の複雑さをすべて考慮に入れて表現を選択する (Verschueren 2009: 19)。話し手のこのような表現選択は、各言語コミュニティの社会規範に大きく左右される。これらの規範は、話し手が従うこともあれば、無視することもあり、さらに、コミュニケーションの当事者間のダイナミックな交渉の一部でもある。とはいえ、いくつかの基本的な側面にもとづいて対人関係を記述することができる。

人間関係の表現に関する研究では、まず、権力や権威を表現する言語的手段が取り上げられてきた (Holmes 1995, Locher 2004, Cutting & Fordyce 2021: 159-161)。対人関係を表す言語表現を、平等対不平等の構図で分析し、権力の表現が言語使用にどのように現れるかが考察されている。しかし、人間関係を表す言語表現は他にも存在する (Haugh et al. 2013)。例えば、敬体・常体の対立 (フォーマル・インフォーマル、印欧語の T-form・V-form など、Brown & Gilman 1960)、呼びかけや挨拶に使われるさまざまな語彙 (Szarkowska 2013: 36-39) などの言語要素が、具体的なコミュニケーション場面において当事者間の親密さや距離感の表出に用いられている (Locher & Graham 2010)。これら 2 つの社会的側面 (権力・権威の表現、親密さや距離の表現) にもとづき、対人関係の社会文化的概念化のプロセスを、認知語用論的枠組みの中で説明することができる (Duck & Usera 2014)。

3.3 研究課題

本稿では、ハンガリー語、スロヴェニア語、日本語において、対人関係がどのように構築されるかを、異文化論の視点を用いて検証する。ス

ロヴェニア語やハンガリー語における敬称と親称²の使い分けや呼びかけの仕方、日本語における述部の形式など、慣習化された言語手段が、意味の表出にどのような影響を及ぼすかを仮定し、その実際を調査する。

さらに、個々の言語が異なるストラテジーを使用するのは、社会文化的側面にも起因すると考えられる。翻訳の作業では、原文における特定のコミュニケーション場面を異なる歴史的背景を持つ目標言語の文脈で、どのようにわかりやすく再構築するかが問題になる。本稿の例で言えば、ハンガリーとスロヴェニアでは一定期間、共産主義体制が存在したが、日本には国家として共産主義体制を実現することはなかったという差異が問題になる。

また、対人関係表現の多様性、つまり、言語的手段と非言語的手段（ジェスチャー、表情、声の調子など）が会話の当事者間の対人関係を構築するためにどのように組み合わせて使用されるかをも示すことができると推測される。

3.4 コーパスと方法論

本研究では、1969年のパチョー・ペーテル監督によるハンガリー映画『証人 (*A tanú*)』の鑑賞のために作成された字幕にもとづく3言語並列コーパスの分析を行う。この映画は、1950年代のハンガリーにおける共産主義独裁政権を風刺的に描いており（ロスチャイルド 1999: 154–163）、「ハンガリーのカルト映画のナンバーワン」（Baski 2024）と評されるなど、これまでに制作されたハンガリー映画の中でも特に重要で影響力のある作品の1つである。

映画の舞台は、共産主義政権が民主主義勢力を排除することで権力を強化していた1950年代のハンガリーである。指導者ラーコシ・マーチャーシュが共産党内の反対勢力を見せしめ裁判で訴追することで、カルト的な権威を築き始めた（南塚 1999: 361–363）。物語の主人公は、ドナウ川の堤防管理人であるペリカーン・ヨーージェフという、ハンガリーの片田舎で暮らす平凡な男である。生真面目で、当時の社会体制においては少々部外者的なこの人物は、やがて、非法共産主義運動時代の旧友で

あるダーニエル・ゾルターン大臣の見せしめ裁判の被告側証人となる。ダーニエルは有力指導者バースティヤ同志の暗殺を共謀した罪に問われていたのである。

物語では、親密で友好的な関係から、全体主義体制にふさわしい大きな階層差によって隔てられた登場人物まで、幅広い人間関係が描かれている。これらの人間関係は、物語を通じて絶えず変化し、対人関係の再構築に必要な交渉行為の重要性を強調している。映画の時代設定は、異なる人間関係における言語使用に明らかな影響を与えるが、分析を通して、3つの異なる言語における異なる言語戦略を観察することが可能である。分析の焦点は、共産主義の過去を含む文脈の中で提示される対人関係の言語構成にある。日本の歴史にはなかったこの側面も分析を通じて考慮された。

本研究では、異なる社会的背景を持ち、互いに異なる関係を持つ登場人物たちが、社会全体の合理的に限定された文脈の中で、対人関係を交渉し、確立し、維持するために、言語がどのように使われているかを調査した。調査のために、映画の中から5つの場面（各27～38秒）を選び、分析を行った。

ハンガリー語テキストは本稿執筆者のボルショシュが書き起こし、ハンガリー語原文の日本語訳とスロヴェニア語訳はそれぞれ、日本とスロヴェニアのハンガリー語学習者が作成した（この映画には、公式に発表された日本語訳やスロヴェニア語訳の字幕はない）⁵。作業は、学年半期にわたる共同教育プロジェクトの一環として、その期間中、学習者たちが協力して字幕を作成した。この観点から、作成されたテキストは、翻訳学の分野における非専門的視聴覚翻訳（Orrego-Carmona 2019）と教育的視聴覚翻訳（Leonardi 2010, Lertola 2019）の文脈で理解することができる。大阪大学では2015年、ハンガリー語の語学力がB1～B2の3・4年生10名が選択クラスの一環として参加（その多くはプロジェクト前にハンガリーで半年または1年間の留学プログラムに参加）、リュブリャーナ大学では2020年、B1～B2の語学力を持つ学生3名が特別選択ゼミの枠でプロジェクトに参加した。両プロセスは、本稿執筆者でハンガリ

一語を母語とする教員の厳密な監督のもとにおこなわれた。通常の翻訳演習の課題とは異なり、実際の翻訳の前に、映画の歴史的背景を学生に理解させるための説明などの準備段階を設け、原文を精読しながら一語一語確認した。同時に、言語的、社会文化的、歴史的な詳細について議論し、途中で起こりうる誤解についても十分に話し合い、講義の形や自由討論の枠の中で、教師が翻訳手順を強力にサポートした。時折、他のハンガリー語母語話者（大阪大学とリュブリャナ大学に留学中のハンガリー語母語話者留学生）も、原語テキストの社会的および歴史的理解を十分に保証するために、非公式ながら教室内外での話し合いに協力した。これらはすべて、原文と文脈を深く詳細に理解するための「品質管理」として機能した。

その後、以上で得たテキストを筆者らが3言語の並列コーパスに仕上げ（付録参照）、各言語の対人関係構築のための言語手段をそれぞれの場面で収集し、それらを言語使用の2つの主要な社会的側面（3.1.参照）に照らして分類した。さらに、ハンガリー語、日本語、スロヴェニア語のデータを互いに比較し、詳細な分析を行なった。

なお、このコーパスには一定の限界がある。字幕翻訳、または一般的な視聴覚翻訳は、限られたスペース内に目標言語のテキストの長さを収めるという空間的制約（Díaz Cintas & Remael 2007）があり、目標言語のテキスト、ひいては対人関係の表現方法にも影響を及ぼす可能性がある。一方、字幕制作者は、視聴者が利用できる文脈的な情報（筋書きや視聴者の一般的な知識、または映画内の視覚的な情報など）を活用して、これらの制限を克服し、字幕からはこれらの情報を除外することがよくある。また、この映画が1950年代を舞台として1969年に制作されたものであることから、現代の言語使用とは状況によっては異なる可能性があるため、結果の一部がこの文脈に限定される可能性もある。さらに、このプロジェクトでは、学習者の言語レベルに起因すると思われる不利な点にもいくつかの方法で対処した。専門家ではない翻訳者の態度、翻訳教育特有の目標や状況、視聴覚翻訳の一般的な特徴（Gambier 2015, Talaván et al. 2016）など、さまざまな要因が目標言語のテキストにどの

程度の影響を及ぼすか、また上記の要因間の力学が翻訳プロセスをどのように形成するのかなど、これらは極めて複雑な問題で、探求が難しいとはいえ、今後さらなる研究の対象となり得る。本研究では、翻訳そのものに焦点を当てるのではなく、むしろ上記のような社会的背景における対人関係構築のための各言語固有のストラテジーを分析する。

4. 対人関係の構築に関する 3 言語間分析

4.1 距離と立場の構築

本研究で扱った並列コーパス（付録参照）には、対人関係の交渉と、場合によってはその継続または再構築、またこの交渉の度合いの違いに関して、多くの例が見つかった。この映画の初めの部分、場面 1 と場面 2 は、社会的文脈にもとづく会話の言語手段と私的文脈にもとづく会話の言語手段の非互換性（例えば、登場人物間の階層的地位の違いと個人的な関係による親近感）が、当事者間の対人関係の交渉にどのようにつながるかを示している。

場面 1 では、登場人物が以前からお互いをよく知っていることは明らかだが、対話は 2 人の社会的上下関係を反映している。具体的には、ダーニエル（大臣）がペリカーン（堤防の管理人）の家族について尋ねる場面だが、ダーニエルの非公式で親密な言葉遣い（㊦ *Szervusz*、㊧ *Živja*、㊨ やあ）、カジュアルな会話に使う親称とそれに呼応する動詞や代名詞、または日本語の終助詞の使用が、ペリカーンのフォーマルな言葉遣い（㊦ *Szabadság*、㊧ *Zdravo*、㊨ こんにちは）と対照的である。ペリカーンは短く不完全な文章で答えるが、これも戦略である。ハンガリー語でもスロヴェニア語でも、個人的な関係を表す人称の使用を避けている。一方、日本語では丁寧体の使用で聞き手に対さなければならないというルールが翻訳にも反映されている。2 人の間のこのような語彙や構文の非対称性が、この場面の対人関係交渉を特徴づけている。

日本語ではこのような非対称性が、一般的に会話を始めるときによく見られる。社会的背景、話者間の心理的距離、会話の具体的な状況によって、公式から非公式へ、あるいは非公式から公式へと、双方向に発話

レベルがシフトすることがある (Bajrami 2016: 25)。

場面 2 では、まず、ダーニエルが敬称の代名詞 (㊦ *maga*、㊦ *vi*、㊦ あなた) とそれに対応する述部 (㊦ *nősült meg*、㊦ *niste poročeni*)、そして呼びかけの形 (姓+㊦ *elvtárs*、㊦ *tovariš* 「同志」) を使っている。日本語では、相手の名前も肩書きも使っていないが、「あなた」という代名詞が登場する (以下例(4)参照)。

(4) a. *Maga nem nősül-t meg, Dániel elvtárs?*

あなた-敬 2 単主 否 結婚する-3 単過 ダーニエル 同志-主

「あなたはまだ結婚していませんか、ダーニエル同志？」

b. *A niste vi že poročeni,*

疑 繫-否-現-2 複 代-男 2 複-主 もう 既婚の-男複-主

tovariš Daniel?

同志-男-主 ダーニエル-主

「あなたはもう結婚しているんじゃないですか、ダーニエル同志？」

c. あなたは独身で？

そして、対人関係を表す言語表現について、ダーニエルがはっきりと言及する。

(5) a. *Mi az, te magáz-ol engem, Józsi?*

なに-単主 それ-単主 代-2 単主 敬称を使う-2 単現 代-1 単対 ヨージ-主

「なんだそれは、君は俺に敬語を使うのか、ヨージ？」

b. *Kaj je zdaj to vikanje, Józsi?*

なに-主 繫-現-3 単 今 その-中単-主 敬語-主 ヨージ-主

「今のその敬語はなんだ、ヨージ？」

c. どうしてそんなにかたいんだ？

ダーニエルはハンガリー語では、親称代名詞 (*te* 「君」) とそれに対応す

る動詞の二人称単数形 (*magázol* 「敬称を使う」) を使っている。スロヴェニア語では、口語的な疑問文と語彙レベルで親密さが現れる。そのあとは語彙のレベルでも、ダーニエルはハンガリー語で親しみのある文体的価値を持つ単語を選び (*ugrat* 「からかう」、*hülyéskedik* 「ふざける」)、一人称複数形を使う。ハンガリー語では、話し手がすでに親称に切り替えている相手に対して敬称を使うのはよくないと考えられているからだ (以下の例 (6) と (7) 参照)。

(6) a *Na ne ugras-suk egymás-t!*

間 否 からかう-1 複命 お互い-対

「お互いをからかうのはよそう。」

b. *No, ne zajebavajva se!*

間 否 ふざけまわる-命-1 双 再-対

「なら、ふざけまわらないでおこう！」

c. なら冗談はやめよう！

スロヴェニア語では、非常にインフォーマルな語彙の一人称双数形 (*zajebavajva* 「ふたりで冗談を言い合う」) と、必ずしも必須ではない人称代名詞 (*midva* 「ふたりで」) を使って明示的に、彼らの昔からの友好的な知己を表現している。

丁寧な表現を使うのは、2 人の社会的地位が不平等だからだとペリカーン自身がはっきり言ったのに対し、ダーニエルはややユーモラスな調子で答える。ハンガリー語の原文では、共通の過去と仲間意識に言及し、スロヴェニア語でも双数形で述べた後、親称に切り替えている。

(7) a. *Mi ketten aztán igazán... Szóval ne hülyésked-j*

代-1 複主 2人で まったく 本当に つまり 否 ふざける-2 単命

ez-zel a magázás-sal, mert megharagsz-om!

その-具 定 敬語-単具 なぜなら 腹が立つ-1 単現

「私たち2人は本当に...だから敬語でふざけるな、腹が立つんだ。」

- b. *Sekiralo* *bi* *me,* *če* *bi* *se* *midva*
 悩ます-時分-中単 繫-仮 代-1 単対 もし 繫-仮 再-対 代-男 1 双主
vikala. *Tako* *da* *nehaj s* *tem*
 敬語を 使う-時分-男双 それで やめる-命-2 単 それ-具
neumnim vikanjem, ker *me* *bo* *razjezilo.*
 ばかな-具 敬語-具 なぜなら 代-1.単対 繫-未-単 怒らす-時分-中単
 「お互いに丁寧語を使うのは迷惑だ。その馬鹿らしい敬語はやめ
 る。腹がたつ。」
 c. 今後 敬語を使うな。腹が立つんだ。

日本語では一人称複数を明示的に表現することはできないが、代わりに「敬語を使うな」と、直接命令形の表現が使われている（例 (7)c）。このすぐ後で、2 人がある関係性について合意したことがわかる。場面の最後には、ダーニエルが「座ってくれ」という授受動詞を使った依頼をしている。視覚的なレベルでは、ペリカーンがダーニエルの肩をたたき、2 人が笑い合い、並んで座ることで、この場面の緊張はようやく和らぐ。以上の場面 1 と場面 2 を以下に図式化する（図 1）。

4.2 確立された対人関係の維持

上述したように、場面 1 と場面 2 では、対人関係の交渉が中心的な役割を果たすが、それに続く場面では、ペリカーンとダーニエルの間の対人関係をどのように維持するかが問題になる。場面 3 では、言語の対人的な機能として、主に登場人物同士が非公式で対等な関係をどのように表現するかに焦点が当てられる。ハンガリー語とスロヴェニア語では、二人称単数の動詞命令形 (⊙ *várj(ál)*, ⊗ (*po*)čakaj「待て」、⊙ *öntsed*, ⊗ *zlij*「注げ」、⊙ *fogd*, ⊗ *drži*「持て」とともに、ダーニエルのファーストネーム (*Zoltán*) が使われるのに対し、日本語では「くれる」という動詞を使った親しい間柄の依頼構文が使われる（待ってくれ、注いでくれ、持ってくれ）。日本語訳では直接の呼びかけは省略されている。ハンガリー語とスロヴェニア語では間投詞 (⊙ *ejnye, hű, hajaj*; ⊗ *hej, o, evo*) と

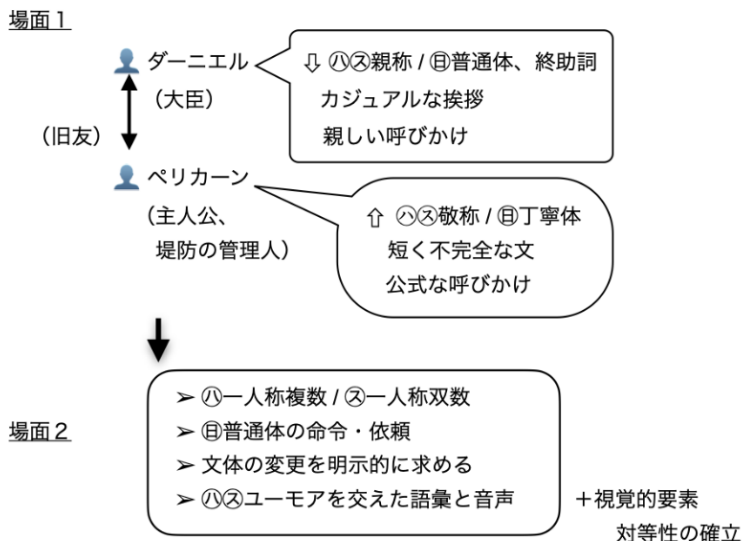


図1 対人関係の交渉 → 確立 (場面1 + 場面2)

話し言葉に特徴的な副詞 (④ *csak*) が使われ、日本語では話し言葉によく使う終助詞 (～よ, ～ぞ) が、場面の情緒的な変化の激しさと参加者間の親密な関係を示している。視覚的な要素が、2 人の登場人物の関係の強さと、その対等性を補強している (2 人は 1 つの目的を持って一緒に行動している)。

この場面では命令文が大きな役割を果たす。前の場面での交渉の結果、ペリカーンはまったく自然に、対等で親密な関係を表す指示文を用いてダーニエルに協力を求めるようになる。実際、このような人間関係で指示を出すときには、3 言語ともこれらの形が慣用化されている。ただし、3 言語とも、これらの命令形に緩和表現が伴う (④ *egy pillanatra* 「ちょっとの間」、*egy kicsit* 「ちょっと」、⑧ *trenutek* 「一瞬」、*malo* 「ちょっと」、⑩ ちょっと)。ハンガリー語では、*csak* 「ほんの」という表現を命令形の動詞とともに使うことが、親密な関係を示す指標となる。

以下、場面 3 を図式化する（図 2）。

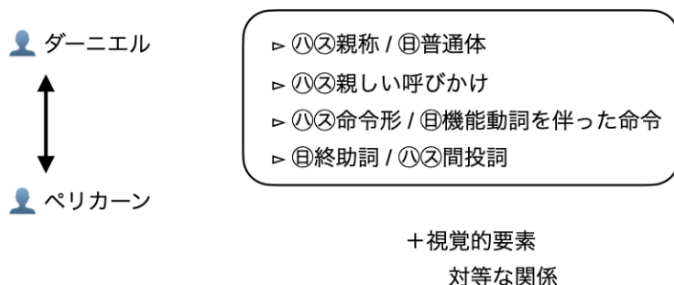


図2 確立された対人関係の維持（場面 3）

4.3 社会的に設定された力関係の中での対人関係の交渉

映画の別の部分、場面 4 と場面 5 では、社会的に設定されている力関係（一般市民と警察官、警察官と大臣）に、会話の当事者が（自発的に、あるいはもう 1 人の当事者についての情報不足によって）挑戦する。これにより、会話の中での対人関係の交渉が言語化されることもある。

まず場面 4では、ペリカーンが社会的に慣習化された言語手段を常に拒否することで、また、警察官の一人も慣習に従わない方法で権力を示そうとするのである。例えば、ペリカーンは口語的な間投詞（㊦ *Ssss...* ㊦ *ššš...* ㊦ シー！）を使って、警察官に静かにするよう挑発的な要求をする。警官に対する敬意の欠如を示す身振りも伴う。返事の中で、警察官の 1 人は口語的な語彙を使う（㊦ *szöveg*「せりふ」、*vagy*「だいたい」）。日本語では、すべての文が普通体で直接的である。警察官は尋問に特有な疑問文と脅して答える。

ペリカーンは警察官の権威に再び挑戦し、直接的な要求をする。日本語では、第三者（ダーニエル）のことを「大臣」と呼び、さらに敬語の「様」を使って、ダーニエルの存在を皮肉を交えて示唆し、「落ち着いてくれ。」と敬語要素のない依頼をする。ハンガリー語では、ペリカーンが

口語的な語彙を正式な動詞の活用で使う。*elvtárs*「同志」という語を（皮肉かもしれないが）使っているのも、正式な話し方の表れである。しかし警察官たちは、スロヴェニア語では下品な表現（*se zajebavate*「ふざけている」）を使いながらも、敬称と正式なスタイルを維持し、さらに怒って答える。彼らはペリカーンが当局を軽視していると直接非難する。対人関係の交渉における緊張と不確実性は、映像の視覚的要素によってより明白になっている。とはいえ、日本の視聴者は共産主義体制の背景を知らないため、ペリカーンと警察官の関係はわかりにくいかもしれない。

ペリカーンの返答を見ると、日本語訳はハンガリー語原文やスロヴェニア語訳よりも丁寧である。

(8) a. *Csinál-ják! Érdekel engem?*

する-3 複命 気になる-3 単現 代-1 単対

「やれ！俺は構わない。」

b. *Naredita, kakor želita!*

する-命-2 双 ～ように 望む-現-2 双

「好きなようにしろ！」

c. どうぞご自由に！

場面 4 を図 3 に図式化する。

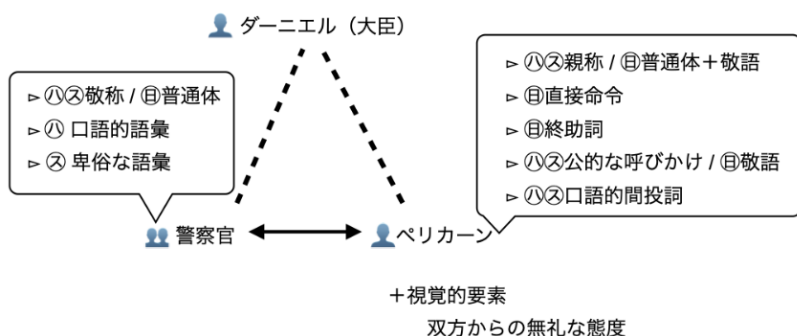


図3 社会的に設定された力関係の中での対人関係交渉（場面4）

場面5では、当事者間の関係が再構築される。大臣であるダニエルが部屋に入って来る時点では、権力の交渉から始まる。登場人物（つまり、体制の代表者とペリカーン）の間に予想される平等／不平等が、ダニエルの敬称（公式）／親称（非公式）の使用の区別によって感じられる。ダニエルは、ペリカーンにはニックネームの *Jóska*、警察官には ㉞ *elvtársak*、㉞ *tovariša* 「同志」で、正式に呼びかける。しかし、和訳ではダニエルはヨーシュカという名前を使っていないので、冒頭の文「何の騒ぎだ？」は、ダニエルがその場にいる全員（ペリカーンと警官たち）に向かって話していると理解することもできる。

警察官たちは最初、ダニエルのことを認識せず、権力を維持しようとする。そのうちの1人が彼に尋ねる。彼らはフォーマルな口調で敬称 (*elvtárs, tovariš*) を使う。

(9) a. *Az elvtárs kicsoda?*

定-単主 同志-単主 いったいだれ-単主

「同志とはいったい何者だ。」

b. *Kdo ste pa vi, tovariš?*

だれ-主 繫-現-2 複 小詞 代-男2 複主 同志-単主

「あなたはどなたですか、同志？」

c. どの誰だ？

このあと、ダーニエルは警察官に対して権威的・形式的な口調で、直接的な命令や二人称複数命令形を使うことで権力を誇示し、支配力を得る（3 言語すべてで、㊦ *Jelentést kérek!* ㊧ *Poročajte!* ㊨ 報告せよ！）。警察官の 1 人が正式な言葉を使って必死になって答える。

- (10) *Miszerint feljelentés érkezett Pelikán József*
 ～という 告発-単主 届く-3 単過 ペリカーン-主 ヨージェフ-主
ellen, miszerint ... feketevágás alapos gyanú-ja miatt.
 ～に対して ～という 闇屠殺-単主 正当な 疑い-所有-3 単 ～のせいで
 「ペリカーン・ヨージェフに対する告訴状が届きました。違法屠殺容疑とのことです。」

スロヴェニア語と日本語の訳もフォーマル・丁寧体だが、日本語の「かかってます」は標準的な丁寧体（かかっています）、または敬語を使った言い方（かかっております）よりも短く口語的である。

警官は正式な口調でダーニエルの前に立ち、彼の命令に従う。彼らはダーニエルの命令に対して、次のように答える（㊦ *Értettem*, ㊧ *Razumem* 「わかりました」、㊨ 承知しました）。全体として、2 人の警察官がダーニエル大臣の存在に気づく前と気づいた後では、言葉遣いが明らかに対照的である。

場面 5 の図式は以下の通りである（図 4）。

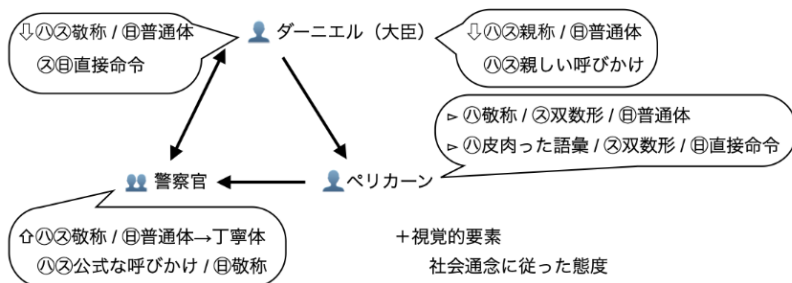


図4 社会的に設定された力関係の中での対人関係の再構築 (場面5)

5. まとめ

本稿では、異なる言語における対人関係の言語的表現手段について、具体例を交えながら分析した。その結果、対人関係が特定の文脈の中で絶えず変化し、動的な性格を持ち、歴史的、社会的、文化的、そして言語的に制約を受けることを明らかにした。この制約の度合いは言語によって異なっていることも確認された。

対人関係の言語表現とその変化は、私的な場や公的な場における対人関係の交渉、確立、維持といったいくつかの場面で観察された。これらの場面では、どちらかといえば普遍的な個人的・社会的関係（友情、市民対警察官、上司対部下）に関わる場面でありながら、いくつかの特定の社会文化的要因が対人関係の言語表現に大きく影響する可能性があることが示された。特に、共産主義時代に関連する社会文化的背景は、日本語の視点からは理解しにくく、この文脈に関連する対人関係も日本語訳では表現しにくい。

本研究で新たに得られた知見を以下にまとめる。

- より親密な、または非公式な関係への移行時には、3言語すべてにおいて、間投詞やモーダル助動詞の使用が大幅に増加し、親称（普通体）の選択も増加する傾向がある。
- 話し手の緊張や疑念は、3言語すべてにおいて、短い文や切り詰めた

文で表現される。

- 皮肉を表現する場合は、ハンガリー語とスロヴェニア語ではフォーマルからインフォーマルに、日本語ではカジュアルから丁寧にと、反対方向の変化が観察された。(例(8)参照)
- 字幕にはスペース上の制約があるため、言語的手段が欠けている部分を映画の聴覚的・視覚的情報が補う場合がある。

対人関係構築のために使用される言語手段の多様さは、その背後にある社会文化的ネットワークの複雑さを示しており、同一の状況設定での同一な対人関係であっても、言語によって異なったストラテジーが採用される場合もある。上記の知見は、翻訳理論（メタ言語、翻訳ストラテジー、他言語における各用語の同等性）や字幕制作の方法論に応用できる。また、翻訳作業や多言語横断の視点は、教師や学習者にとって、母語と学習言語に関する理解を深め、言語意識を高めるものである（Borghetti 2011）。さらに、この研究は外国語教育や異文化語用論における今後の研究にも貴重な示唆を与えるものである。

略号一覧

代	人称代名詞	男	男性	仮	假定形
間	間投詞	女	女性	命	命令形
否	否定詞・否定形	中	中性	未	未来時制
定	定冠詞	単	単数	現	現在時制
疑	疑問詞	双	双数	過	過去時制
再	再帰辞・再帰代名詞	複	複数	繋	繋辞
1	一人称	主	主格	受分	受動分詞
2	二人称	対	対格	時分	時制分詞
3	三人称	具	具格	過分	過去分詞
		所有	所有格		

注

- 1 Interpersonal relationship (IPR)、日本語では人間関係、または対人関係という。
本稿では「対人関係」で統一する。
- 2 magázás と tegezés (ハンガリー語)、vikanje と tikanje (スロヴェニア語)。多くの印欧語にこの区別があり、V-form と T-form と呼ばれる (Brown & Gilman 1960)。
本稿では敬称 (V-form)、親称 (T-form) で統一する (大島・ビリック 2019: 24)。
- 3 以下、実際の語句例を示す場合、ハンガリー語に㊦、スロヴェニア語に㊧、日本語には㊨の記号を用いる。
- 4 a nyelv interszubjektív megismerő és interperszonális kapcsolatteremtő metafunkciói
- 5 付録の3言語並列コーパス参照。映画の公式英訳 (NFI 2017)、分析シーンの説明と画像、本稿執筆者によるメモを含む。

参考文献

- Bajrami, Jasmina. (2016). Speech level shift in Japanese and Slovene. *Acta Linguistica Asiatica*, 6(2), 23–51. (2024 年 11 月 10 日最終確認)
- Bencze, Lóránt (2005) Politeness in Hungary: Uncertainty in a Changing Society. L. Hickey/M. Stewart (ed.), *Politeness in Europe*, Clevedon: Multilingual Matters, 234–246. (2024 年 10 月 15 日最終確認)
- Borghetti, Claudia (2011) Intercultural Learning through Subtitling: The Cultural Studies Approach. L. Incalcaterra McLoughlin/ M. Biscio/M. A. Ni Mhainnin (ed.), *Audiovisual Translation: Subtitles and Subtitling*, Frankfurt am Main: Peter Lang, 111–137.
- Brown, Roger, Gilman, Albert (1960) The Pronouns of Power and Solidarity. In: Sebeok, Thomas A. (ed.) *Style in Language*. Cambridge: MIT Press. 253–276.
- Cutting, Joan, Fordyce, Kenneth (2021). *Pragmatics: A Resource Book for Students* (4th ed.). New York: Routledge.
- Debray, Caroline, Spencer-Oatey, Helen (2022) Co-constructing good relations through troubles talk in diverse teams. *Journal of Pragmatics*, 192, 85–97.
- Díaz Cintas, Jorge, Remael, Aline (2007) *Audiovisual translation: Subtitling*. Manchester: St Jerome.
- Domonkosi, Ágnes (2002) *Megszólítások és beszédpartnerre utaló elemek*

- nyelvhasználatunkban*. Debrecen: Debreceni Egyetem, Magyar Nyelvtudományi Intézet.
- Duck, Steven W., Usera, Daniel (2014) Language and Interpersonal Relationships. In: Holtgraves, Thomas M. (ed.), *The Oxford Handbook of Language and Social Psychology*. Oxford: Oxford University Press. 188–200.
- Fitzsimons, Gráinne M., Anderson, Joanna (2013) Interpersonal Cognition: Seeking, Understanding, and Maintaining Relationships. In: Carlston Donal (ed.), *The Oxford Handbook of Social Cognition*, Oxford: Oxford University Press. 590–615.
- Gambier, Yves (2015) Subtitles and Language Learning (SLL): Theoretical Background. In: Gambier, Yves, Caimi Annamaria & Mariotti, Christina (eds.). *Subtitles and Language Learning. Principles, strategies and practical experiences*. Peter Lang, Bern. 62–82.
- Gifford, Robert (2010) The Role of Nonverbal Communication in Interpersonal Relations. In: Horowitz, Leonard M./Strak, Stephen (ed), *Handbook of Interpersonal Psychology*. New York: Wiley. 171–190.
- Givón, Talmy (1991) Markedness in grammar: distributional, communicative and cognitive correlates of syntactic structure. *Studies in Language* 15, 335–370.
- Haugh, Michael, Kadar, Daniel Z., Mills, Sara (2013) Interpersonal Pragmatics: Issues and debates. *Journal of Pragmatics* 58, 1–11.
- Holmes, Janet (1995) *Women, Men and Politeness*. London: Longman.
- Kato, Sumi (2013) Mechanism of Interpersonal Relationship Construction Observed by Mapping Linguistic Evaluation of Family Therapy Interview Texts Quantitative Analysis. *Japanese Journal of Family Psychology* 27(1), 29–43.
- Krauss, Robert M., Chiu, Chi-Yue (2016) Language and social behavior. In: Fiske, Gilbert S./Lindsey, G. (ed.), *Handbook of social psychology* (4th ed.), 2, Boston: McGraw-Hill. 41–88.
- Krauss, Robert M., Fussell, Susan R. (1996) Social psychological models of interpersonal communication. In: Higgins, E. T./Kruglanski A. (ed.), *Social psychology: A handbook of basic principles*. New York: Guilford. 655–701.
- Leonardi, Vanessa (2010) *The Role of Pedagogical Translation in Second Language Acquisition*, Peter Lang, Bern.

- Lertola, Jennifer (2019) *Audiovisual translation in the foreign language classroom: applications in the teaching of English and other foreign languages*. Research-publishing.net, Voillans.
- Levshina, Natalia (2017) A Multivariate Study of T/V Forms in European Languages Based on a Parallel Corpus of Film Subtitles. *Research in Language*, 15(2), 153–172.
- Locher, Miriam (2004) *Power and Politeness in Action: Disagreements in Oral Communication*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Locher, Miriam A., Graham, Sage L. (2010) Introduction to Interpersonal Pragmatics. M. Locher/ S. Graham (ed.), *Interpersonal Pragmatics*, Berlin: Mouton de Gruyter, 1–13.
- Locher, Miriam A., Watts, Richard J. (2005), Politeness Theory and Relational Work. *Journal of Politeness Research* 1(1), 9-33.
- Matsumoto, Yoshiko (1989) Politeness and Conversational Universals: Observations from Japanese. *Multilingua* 8, 207–221.
- Orrego Carmona, David (2019) A holistic approach on non-professional subtitling from a functional quality perspective. In: *Translation Studies*, 12(2), 196–212.
- Pardeshi, Prashant, Kageyama, Tarō (ed.) (2018) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Schwartz, Laura (1980) Syntactic markedness and frequency of occurrence. T. Perry (ed.), *Evidence and argumentation in linguistics*, Berlin: Walter de Gruyter, 315–333.
- Shigemori Bučar, Chikako, Žele, Andreja (2024) *Japonska skladnja za slovensko govoreče*. Ljubljana: ZZFF (the Ljubljana University Press, Faculty of Arts).
- Szarkowska, Agnieszka (2013) *Forms of Address in Polish-English Subtitling*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Talaván, Noa, Ávila-Cabrera, José-Javier & Tomás Costal (2016) *Traducción y accesibilidad audiovisual*. Editorial UOC, Barcelona.
- Tátrai, Szilárd (2011) *Bevezetés a pragmatikába. Funkcionális kognitív megközelítés*. Budapest: Tinta Könyvkiadó.
- Toporišič, Jože (2004) *Slovenska slovnica*. 4th ed. Maribor: Obzorja.
- Veres-Guspiel, Agnieszka (2017) *A személyközi viszonyok konstruálásának kognitív pragmatikai vizsgálata a magyar és a lengyel nyelvű kérésekben*. <<https://edit.elte.hu/>

xmlui/bitstream/handle/10831/33370/dissz_veresguspiel_agnieszka_nyelvtud.pdf?sequence=1&isAllowed=y> (2024 年 10 月 13 日最終確認)

Verschueren, Jef (1999) *Understanding Pragmatics*. London: Oxford University Press.

Verschueren, Jef (2009) *Handbook of pragmatics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Yang, Jianhong (2018) Linguistic Status of Markedness and Its Defining Criteria. *Advances in Social Science, Education and Humanities Research*, 151, 400–406.

大島一、ビリック・エヴァ (2019) 『ハンガリー語の会話と文法』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 <<http://www.a.tufs.ac.jp/documents/training/ilc/textbooks/2017Hungary1.pdf>> (2024 年 11 月 10 日最終確認)

南不二男 (1987) 『敬語』東京、岩波書店

南塚信吾編 (1999) 『ドナウ・ヨーロッパ史』(世界各国史 ; 19) 東京 : 山川出版社。

ロスチャイルド, J. (羽場久泥子・水谷驍訳) (1999) 『現代東欧史 : 多様性への回帰』東京 : 共同通信社。

資料

Baski, Sándor *The Witness*. <<https://nfi.hu/en/core-films-1/films-3/feature-films-1/the-witness-a-tanu.html>> (2024 年 6 月 25 日最終確認)

NFI 2017 = A tanú ('The Witness') DVD, (1969) Film directed by Péter Bacsó, Magyar Nemzeti Filmalap – Filmarchívum Igazgatóság, Budapest.

付録 分析に使用した並列コーパス。英訳はハンガリー国立デジタルアーカイブ・映画研究所 (Magyar Nemzeti Digitális Archívum és Filmintézet) が2013年に出版したDVD版から。



A tanú – 場面 1 07:00–07:37						
場面の内容 ドナウ河畔でスーツを着て釣りをしていたダーニエル大臣が、非合法共産主義運動時代の旧友である堤防管理人ペリカーンに声をかけられる。ダーニエルは旧友のようにペリカーンに挨拶するが、ペリカーンはかなり驚いた様子で用心深く答える。						
	ハンガリー語 (SL)	スロヴェニア語 (TL1)	日本語 (TL2)	英語	映像	注
ダーニエル	Szervusz, Fickó!	Živjo, Fickó!	やあフィツコー。	Hello Fickó!		ペリカーンの飼いがダーニエルのもとに駆け寄る。ダーニエルは快く犬を迎える。
ダーニエル	Szervusz, Józsi!	Živjo, Józsi!	やあ。	Hello Józsi!		ペリカーンもダーニエルのそばに来る。
ペリカーン	Szabadság, Dániel elvtárs!	Zdravo, tovariš Daniel!	こんにちは ダーニエル大臣。	Hello, Comrade Dániel!		
ダーニエル	Na mi az, mit csodálkozol? Kijöttem egy kicsit horgászni. Négy éve nem voltam a Dunán.	Kaj si tako presenečen? Prišel sem malo na ribolov. Štiri leta nisem bil pri Donavi.	何に驚いている？釣りに来ただけさ。4年ぶりのドナウ川だ。	Why so surprised? I've come to do a bit of fishing. I've not been here for ten [sic!] years.		ダーニエルは丸太の上に座り、ペリカーンは数歩離れて立っている。
ペリカーン	Észrevettem.	Ja, opazil sem.	なるほど。	So I noticed.		
ダーニエル	Mi újság nálatok? Az asszony?	Kako ste kaj? Žena?	変わらないかね？奥さんは？	How's life? How's the wife?		
ペリカーン	Megszökött egy uszályossal. Egy románal.	Zbežala je z nekim mornarjem. Romunom.	船長と逃げていきました。ルーマニア人でした。	She ran off with a sailor, a Romanian.		
ダーニエル	Hát igen...	Aha...	そうか...	Oh, well.		

ダーニエル	És a gyerekek?	Kaj pa otroci?	子供達は？	How about the children?	
ペリカーン	Jól vannak.	Vse v redu.	問題ないです。	Fine.	

A tanú – 場面 2

07:38–08:04

場面の内容 ペリカーンがダーニエルの結婚について丁寧体で尋ねる。ダーニエルは驚き、ふざけた調子でペリカーンに答え、旧交を温めながら普通体で尋ねる。ペリカーンはダーニエルの肩を叩き、ダーニエルは立ったままのペリカーンを隣に座るように誘う。


	ハンガリー語 (SL)	スロヴェニア語 (TL1)	日本語 (TL2)	英語	映像	注
ペリカーン	Maga nem nősült meg, Dániel elvtárs?	A niste vi že poročeni, tovariš Daniel?	あなたは独身で？	Aren't you married yet, Comrade Dániel?		ペリカーンがダーニエルに一步近づく。
ダーニエル	Mi az, te magázol engem, Józsi?	Kaj je zdaj to vikanje, Józsi?	どうしてそんな かいんだ？	Why so formal with me, Józsi?		
ペリカーン	Hát hogy beszéljek egy miniszterrel?	Ja no, kako naj se obračam do ministra?	そんな、大臣にどう話せば良いか？	How should I speak to a minister?		
ダーニエル	Na ne ugrassuk egymást! Mi ketten aztán igazán... Szóval ne hülyéskedj ezzel a magázással, mert megharagszom!	No, ne zajejavajva se! Sekiralo bi me, če bi se midva vikala. Tako da nehaj s tem neumnim vikanjem, ker me bo razjezilo.	なら冗談はやめよう！ 今後 敬語を使うな 腹が立つんだ。	Let's forget the ceremony. I'll get angry if we of all people, stick to formalities.		ダーニエルはおどけた調子でペリカーンを脅す。数秒の沈黙の後、ペリカーンはダーニエルの肩を叩き、二人は笑いあう。
ダーニエル	Ülj le!	Sedi!	座ってくれ！	Take a seat!		ペリカーンがダーニエルの隣に座る。

A tanú – 場面 3

08:19–08:56

場面の内容 ペリカーンとダーニエルが土手を歩いていると、ペリカーンが突然、地リスの穴を見つける。近くの小屋に駆け込み、バケツに入った水とスコップを取ってくる。穴を見て驚いていたダーニエルに水を渡す。ダーニエルが穴に水を注ぐと、穴から2匹の小動物が出てきた。ペリカーンはダーニエルにその地リスを捉えるように頼み、尻尾を切り落とす（堤防を壊す動物の尻尾を切り落とすと、子供たちは賞金をもらえるからだ）。


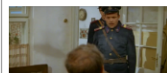

	ハンガリー語 (SL)	スロヴェニア語 (TL1)	日本語 (TL2)	英語	映像	注
ペリカーン	Ejnye csak, várj egy pillanatra!	Hej, čakaj trenutek!	待ってくれ！	Hold on!		ペリカーンが地面にできている穴へ走り、ダーニエルが続く。
ダーニエル	Mi az? Mi történt?	Kaj? Kaj se dogaja?	どうした？	Why, what happened?		
ペリカーン	Várjál csak! Hát az ürge a gát legveszedelmesebb ellensége! Egy pillanatra várjál csak!	Počakaj! Tekunica je nevarna za nasip! Počakaj trenutek!	ジリスは堤防の敵だ！一瞬だけ待ってくれ！	Gophers are the dike's most dangerous enemies. Wait a moment.		ペリカーンが小屋に駆け込み、ダーニエルは穴の横で珍しそうに見ている。
ダーニエル	Ez egy ürgelyuk?	A je to njena luknja?	これが巣穴か？	Is that their hole?		
ペリカーン	Öntsed csak, Zoltán! Fogd csak meg! Hű, hogy örülnek majd a gyerekek ennek! Két forintot kapnak a farkukért a MÉH-ben, te! Hajaj!	Zlij to v luknjo, Zoltán! O, kako bodo otroci srečni! Dva forinta dobijo za vsak rep v zbirnem centru.	注いでくれ！捕まえるんだ！あぁ子供達も喜ぶよ。1匹2フォリントの稼ぎだ！	Pour it down, Zoltán. The kids will be pleased, they get 2 forints for a tail at the depot. Oh my....!		ペリカーンが水とシャベルを持って穴に戻り、ダーニエルに水を渡す。ダーニエルが穴に水を注ぐ。
ペリカーン	Vigyázz, jön!	Evo jo!	ほら 出てきたぞ！	Watch out it's coming!		ペリカーンが穴から出てくる動物をシャベルで叩く。




ダーニエル	Itt a másik!	Še druga!	2 匹目だ！	Here is another one!		
ペリカーン	Fogd csak meg egy kicsit!	Drži jo malo!	ちょっと持ってきてくれ！	Hold it up for a moment.		ペリカーンがナイフを取り出し、地面から一匹を拾い上げ、ダーニエルにそれを持つように頼む。

A tanú – 場面 4

11:04–11:30

場面の内容 二人の警察官がペリカーンの家に来て、豚を無許可で屠殺したという理由で家宅捜索をする。一方、ダーニエル大臣は別の部屋で眠っている。ペリカーンはくつろいだ様子で、寝ている大臣のことを話して警官を落ち着かせようとする。警官はペリカーンの言葉を信じず、彼を脅す。ついにペリカーンはあきらめ、家宅捜索をするよう警官に告げる。



	ハンガリー語 (SL)	スロヴェニア語 (TL1)	日本語 (TL2)	英語	映像	注
ペリカーン	Ssss..	Ššššš..	シー！			ペリカーンがテーブルに座り、タバコを吸いながら新聞を読んでいる。警官が2人入ってくる。
警察官	Mi az, hogy ssss? Mit bizalmaskodik velem? Hol az a disznó? Most már aztán vége minden finomkodásnak!	Kaj ššš? Kako (pa) govorite z mano? Kje je svinja? Zdaj bo moje prijaznosti konec.	何だ なれなれしい！ 豚はどこだ？ 秘密を暴いてやる！	What do you mean, "shush"? Where's that pig, or I'll get rough.		
ペリカーン	Csendesebben, elvtársak! A miniszter elvtársat ne költse fel!	Tišje, tovariša! Prebudila bosta tovariša ministra!	落ち着いてくれ！ 大臣様を起こしてしまう。	Not so loud, comrades, or you'll wake the comrade minister.		ペリカーンが立ち上がり、警官に対峙する。




警察官	A miniszterelvtársat! Már ez a szöveg is megér vagy másfél évi börtönt. Nem elég, hogy feketevágást hajtott végre, még a legfelső kormányt is káromolja, maga szerencsétlen!	Tovariša ministra! Tako govorjenje bi vas lahko stalo leto in pol zapora. Ni vam dovolj, da na skrivaj zakoljete prašiča, z vodilno administracijo se zajebavate, ničvreden ste!	大臣様？その言葉も死刑か、牢獄行きに値する。豚を殺しただけで済まない、国の内閣さえものしったんだ！	"Comrade Minister"! Talk like that will land you in jail. Isn't illegal slaughtering enough, without abusing leading comrades?		警官の一人がペリカーンの振る舞いをなじって、怒鳴りつける。
ペリカーン	Csinálják! Érdekel engem?	Naredita, kakor želite! Briga me!	どうぞご自由に！	Do as you like!		ペリカーンは手を振って相手にせず、座り直す。
警察官	Házkutatás! Indulj!	Preiskava! Takoj!	家宅捜索だ！始めろ！	It is a house search.		

A tanú – 場面 5

11:51–12:25

場面の内容 騒ぎ声で目を覚ました大臣ダーニエルは、ペリカーンと2人の警察官が大声で言い争っている部屋に入ってくる。自ら姿を現し、状況を把握したダーニエルは、警官に家の捜索を開始するように命令する。

	ハンガリー語 (SL)	スロヴェニア語 (TL1)	日本語 (TL2)	英語	映像	注
ダーニエル	Mi az, Jóska? Mi folyik itt elvtársak?	Kaj je, Jóska? Kaj se dogaja, tovariša?	何の騒ぎだ？ 何をしている！	What's going on, comrades?		警官たちが大きな音を立てながら家の中を捜索する。
警察官	Az elvtárs kicsoda?	Kdo ste pa vi, tovariš?	どこの誰だ？	Who are you, comrade?		警察官が振り返らずに尋ねる（ダーニエルの姿は見えない）

ダーニエル	Még sose láttak engem? Jelentést kérek!	Me niste še nikdar vide!? Poročajte!	私を知らないのか！報告せよ！	Have you never seen me before? Report, if you please.		ダーニエルが声を張り上げ、威厳をもって話す。
警察官	Miniszter elvtársnak jelentem, házkutatás. Miszerint feljelentés érkezett Pelikán József ellen, miszerint... feketevágás alapos gyanúja miatt.	Tovariš minister, poročam, da izvajamo preiskavo. Dobili smo prijavo, da je József Pelikán brez dovoljenja zaklal prašiča.	大臣様 報告致します、 家宅捜索です。彼に対 する密告がきました。 豚を殺した容疑がかか ってます。	Comrade Minister, it's a house search. József Pelikán has been reported for illegal pig- slaughtering.		警察官が直立不動 で対応する。
ペリカーン	Kutassanak, elvtársak! A feljelentés szent dolog!	Kar preiščita, tovariša! Prijava je sveta zadeva!	続けてくれ！密告は不 可避だ！	Proceed with your search, comrades, reports are sacred.		ペリカーンは冷静 に話す。
ダーニエル	Tegyenek mindent a helyére!	Vse pospravite spet na svoje mesto!	全てもとに戻せ！	Put everything back in place.		ダーニエルが威厳を 持って話す。
警察官	Értettem.	Razumem.	承知しました。	Understood!		